北海道新聞　30年11月22日（朝刊・小樽後志）

商大生が提案
小樽の未来像
日本公庫シンポ

日本政策金融公庫の統合10周年を記念したシンポジウム「商大生が地域課題解決に向けた金融機関の役割を本気で考える」が16日、小樽商大で開かれ、参加者はパネルディスカッションなどを通して小樽の未来を考えた。

日本公庫小樽支店が主催。シンポジウムでは、小樽商工会議所の野田昌孝事務局長が「小樽市の現状と課題」について講演したほか、同大の学生4人が「小樽を働く場所、働きたい場所にするための金融機関の役割」をテーマに研究を発表した。

商学部商学科3年の松井ほのかさんは、若い世代に小樽での起業を促す施策について「起業に不安を持つ人と一緒に考えるイベントを開き、後押しすることも重要」と提案した。

「小樽を働きたい場所にするために」をテーマにしたパネルディスカッションには大津晶准教授が司会を務め、北海道信用金庫の下中博文常務理事や北洋銀行小樽中央支店の織田亨支店長らが参加。斎藤一朗教授は「65歳以上のお年寄りや女性に働いてもらえる場をどのようにつくるか。ユニバーサル化を進めるなど優しい環境が大切になる」と指摘した。（前野貴大）

「小樽を働きたい場所にするために」をテーマにパネルディスカッションを行う参加者